

／ 134 科学者へのお仕置きか 学術会議任命拒否の怪

サンデー毎日 2020年12月15日



日本学術会議＝東京都港区六本木で、2019年4月25日、小座野容斉撮影

日本には研究で食べている人が約87万人いる。そこから選ばれた210人で構成するのが、「学者の国会」と日本学術会議だ。国内外のさまざまな課題を学術の視点から議論し、政策に反映する役割を担う。

だが、本物の国会に比べて、学術会議の活動が話題になることはほとんどなかった。

世論調査などによると、菅義偉首相による6人の任命拒否を「理解できる」と考えている国民が少なくない。理由は多分「だって知らないもん。学術会議って存在する意味あるの？」というあたりだろう。

科学記者になったころ、学術会議を担当した。担当するまで私も存在を知らなかった。時には会長を囲む懇談（パンケーキは出ない）もあったが、ニュースになりにくいので他の取材を優先させることもあった。

もちろん、学術会議は生殖補助医療や巨大科学や環境問題など、旬の話題について丁寧に真面目に議論を重ね、報告や提言をまとめていた。だけど分厚い報告書は回りどく、「これをどうやって報じろと？」と言いたくなることもあった。案の定、記事は地味な扱いになった。

そんな事情も、学術会議の活動を目立たなくさせていたと思う。だがそのことと、政治が人事に不当に介入したりリストラの口実にしたりすることは別次元の問題だ。

科学者は何より正しさを重んじる。不確かさを含む現在進行形の課題については、政治家のように誇張したり言い切ったりできない。

そんな中、2017年に出した軍事研究に関する声明は、「**政府の介入が過ぎる**」と指摘する内容で、**反響を呼んだ。メディアの扱いも大きく、国会でも取り上げられた。**

学術会議の存在感が見える例だが、政権の意向と食い違うものだったことが任命拒否につながったとも言われている。

権力に忖度(そんたく)しない科学者へのお仕置き？ もちろん、首相は口が裂けても「そうです」とは言えないだろうけど。(続く)

もとむら・ゆきこ

北九州市生まれ。1989年毎日新聞社入社。科学環境部など経て現在、論説委員。最新刊『カガク力を強くする！』（岩波ジュニア新書）。趣味は居酒屋、温泉